

## 第一章 夕霧の物語 継母垣間見の物語

[第一段 八月野分の襲来]

中宮の御前に(おまえに、お庭先に)、秋の花を\*植ゑさせたまへること(秋の花をお植ゑあそばしていらっしやいますが)、常の年よりも\*見所多く(例年以上に趣向を凝らした庭造りで)、\*色種を尽くして(色の種類を多くして)、\*よしある\*黒木赤木の籬を結びませつつ(仕切りには手の込んだ黒木赤木の飾り垣根を組み結んであって)、同じき花の枝ざし(分けされた一塊の同じ色の花の枝ぶりや)、姿(景色は)、朝夕露の光も世の常ならず(朝夕に結ぶ露の光も格別なもので)、玉かとかかやきて(玉のように輝いて)作りわたせる野辺の\*色を見るに(作り込まれた野辺の表情を見れば)、はた(すっかり)、春の山も忘られて(春の山の賑わいも忘れてしまって)、\*涼しうおもしろく(清々して気分が晴れて)、心も\*あくがるるやうなり(その見事さに引き込まれて思わず、心を奪われるようです)。 \*「植ゑさせたまへること」は注に<二重敬語、中宮への重々しい待遇。>とある。言い切りの「こと」も重々しさの強調で、多くの場合は<ものたるや>くらいに相当タメた言い方だろうが、この段頭の場面設定の文として、出だしから重くなり過ぎないような言い換えとしては<が>という一呼吸程度のタメとする。 \*「見所多し」は<見せ場を多く設けてある→趣向を凝らしてある>で現代語に通じる。 \*「色種(いろくさ)」は、古語辞典に「色草」と表記されく種々の草。特に、秋の野に咲く種々の草。>と如何にも此処の文に見合うような説明がある。が、此処の文では「秋の花を植ゑさせたまへること」と書き出してあるので、「いろくさ」の語に<秋の草>の意を重ねることには却って抵抗がある。「いろ」は<固有の特徴>で今でも「色」と言う。「くさ」は<種類>で今でも「種」と書く。そのままが良いのではないだろうか。 \*「よし」は<由緒、由来、事情、理由>や<風情、風趣、様子>を示すこともあるが、此処では<方法、手段>の意味で「よしある」は<よく作られた→手の込んだ>なのだろう。 \*「黒木(くろき)」は<皮のついたままの材木>。「赤木(あかき)」は<皮をはいだ木>。と、古語辞典にある。「籬(ませ)」は「透垣(すいがい)」と同じで<組み板や編み竹の組み目や編み目を籬して透き間を空けた用途別や趣旨別の区分を示す為の中身が見える仕切り>のことらしい。で、「結び交ず」は左右から斜めに渡した部材の<交差点を紐で結びつける>のだろうから、黒木赤木はあまり太い無骨な幹は考え難く、小枝や細い幹だったかと思う。 \*「色」は<固有の特徴>だが、この「色」は「野辺」という全体を修辞しているので<個別の特性>ではなく、その場の<その時点での特性>を示していて、そういうものは<表情>と言う。 \*「涼し」は<清く澄んでいて、気分が清々する>と古語辞典にある。 \*「あくがる」は現代語の「憧れる」に繋がる古語らしい。「あくがる」も「憧れる」も<理想とする物事や人物に強く心が引かれる。思い焦がれる。>または<上の空になる、さまよう>という意味の、同じような言葉として大辞泉に掲載がある。ところで、私は「憧れる」の意味として、<心引かれる、思い焦がれる>が高じて<上の空になる>のだろうと、以前から漫然と勝手に考えていた。が、「あくがる」は<「かる」は離れる意。>と古語辞典に説明があり、大辞泉には《本来は、あるべき所から離れる意》とある。となると、呪術めいた霊的な離脱状態を表す意味が先に在って、そういう状態になる説明の一つに<心引かれる、思い焦がれる>という意味が後付された、という経緯が強く示唆される。しかし、「あくがる・憧れる」には<思い焦がれる>の語感はある。「焦がれ」に情感強調の接頭語「あ」が付いた「あ・こがれ」という解釈も、多くの人がそのように想念した時点で‘成立’している、のだろう。さらには「飽く」も<満たされる>であり、その語感からすれば「あく・がる」を<満たされたい思い>と取る事も出来そう。いやつまり、ある言葉の成り立ちや変遷に仮に大きな一筋の道が厳然とあったとしても、その大元の例えば「あ」「く」「こ」「が」「げ」「れ」「る」などの各一音一語自体に、少なくとも一定範囲内の集団で概念の共有がなければ、それらの‘コトバ’に社会的実効性は存在しないのであり、逆に言

えば、多くの人々がそれらの基本概念から同様の想念を共有すれば、大きな筋道もいつかは遠く細い道になって、それと離れた意味と成っても、その語は生き続ける。その意味では「思い焦がれる」も依然として有力な言い換え候補だ。それに此処の文は「はた春の山も忘られて」に続くものなので、「憧れる」の「他者を羨望する」語感から、秋を春より「より優れたものに思う」という比較文に取る事も出来そうに見える。それでも「心も」という言い方は、理屈ではなく感性でものを言っているのだらうと、私は「被魅了状態」の方を選ぶ、という理屈を付けて、この「あくがる」は「焦がれる「思い」」よりは、正気を失って「心此処にあらずと彷徨う「状態」」を示すとして、「心を奪われている」と言い換える。それにしても、美辞麗句口調のこの文は一体誰の視線でものを言っているのだらう。源氏殿でもなく、語り手個人の感想でもなさそうで、世情の評価を装って意図した世論形成を図る為の、下地作りみたいなものだらうか。マスコミ報道の厚かましさを、フと思う。

春秋の争ひに、昔より秋に心寄する人は\*数まさりけるを、\*名立たる春の御前の花園に心寄せし人びと、\*また引きかへし移ろふけしき(再び掌を返すように秋に心変わりする様子は)、世のありさまに似たり(時勢におもねる世情と似ていた)。\*「数勝る」について、注釈には秋を愛でる古文・名歌などを引いてあるが、春を愛でる文や歌もあるに違はなく、いくつかの例文を以って「数まさる」の傍証になるべくもない。今なら「春」と「秋」とで、どちらが多く文や歌に愛でられて来たかを、キーワード検索で累積計算して統計比較するのも、割と容易に出来そうにも見えるが、その数値はキーワード設定でいくらでも変わるし、キーワード設定は正に狙いを絞るもので、論旨に沿った数字説明を可能とし、客観性を意味しない。また、確かにそれらの歌などは「秋に心寄する」ものではあるだらうが、梅や桜や藤が咲き盛る春爛漫の嬉しさや秋の紅葉の深い味わいなどが、歌や文にしたくなるほど多くの人に印象深いことは、日本の四季の気候自体の特性であり、人がその環境に適合して生きていることの表象の一つなのであって、歌や文に著されたから素晴らしいのでは無い。しかし優劣の正確な判定はともかく、数多く記されて来たことは間違いないので、「昔より秋に心寄する人は数まさりける」という言い方に一定の説得力はあるのだらう。\*「名立たる」は「かく」とは書かれていないがくこのように名声のある」という言い方で、如何にもいくつか引歌の例示を列記したかの独特な言い回しで、注にも二例参照紹介がある。が、「春の御前」が注にもく六条院春の御殿。>とあるように、この「名立たる」は胡蝶第一章の「春の町の船樂と季の御読経」で作者が具体的に描写した事柄を指しているに違いない。\*「また引きかへし」からは渋谷訳文が分かり易いのでそのまま転用させていただく。また、「移ろふけしき世のありさまに似たり」は注にく「色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(古今集恋五、七九五、伊勢)>が参照紹介されている。別に「春秋の争ひ」は決着をつける必要がある事柄では無く、話題を盛り上げるための言い方に過ぎないが、「移ろふものは世の中の人の心」とまで言ってしまうと、和やかな言葉遊び以上のこだわりも感じさせる。

これを\*御覧じつきて(中宮はこの庭をお気に入りになって)、\*里居したまふほど(里住まいを為さっていらして)、御遊びなどもあらまほしけれど(音楽会なども為さったそうでしたが)、八月は(はちぐわちは)故前坊の(こぜんぼうの、亡き父前皇太子の)御忌月なれば(おんきづきなれば、御命月なので)、心もとなく思しつつ明け暮るるに(気兼ねなさってお暮らしなさっている内に)、この花の色まさるけしきどもを御覧ずるに(この花々がますます色付いて来るのを御覧になります)、野分(のわき、秋の嵐が)、例の年よりもおどろおどろしく(例年よりも強い勢いで)、空の色変りて吹き出づ(空の色を変えて吹き出していました)。\*「御覧ず」は「見る」の尊敬語。「御覧じつく」は「見付く」で「見慣れる」または「見つける、見出す」。此処では「見出す→価値を知る→気に入る」だらう。\*「里居したまふ」は注にく中宮への重々しい待遇から普通の敬語になる。>とある。ということは、視点が一般世間から邸内の身内視線に変わった、ということか。

花どものしをるるを(花々が萎れるのを)、いとさしも思ひしまぬ人だに(特にそれほどは深く思わない人でさえ)、あなわりなど思ひ騒がるるを(これはひどいと胸を痛める強風なので)、まして(まして中宮は)、草むらの露の\*玉の緒乱るるままに(野の尊い花々の命が無残に引き千切られて散らされて行くのを止める手立ても無いままに)、御心惑ひもしぬべく思したり(正気を失うほどに呆然とお思いでした)。 \*「玉の緒」は<玉を貫き通した細い糸。また、その宝玉の首飾り。>と大辞泉にある。整然とした様を示す画像的な表現、だろうか。また、「たま」を「魂」の意と見て<命を繋ぐもの、命>という言い方もある、とのこと。思いを込めやすい語のようで「玉の緒の」という言い方で<長し・短し・絶え・乱れ・継ぐ>などに掛かる枕詞になる、とのこと。此処でも「乱る」とある。如何にも歌語的表現の文だろうし、「草むらの露の玉」が静かに結んでいる佇まいに、秋の風情が巧みに表現されている、とは私でも感じる。

\*おほふばかりの袖は(春の嵐に桜が一掃されるのを惜しんで「空を覆うほどの大きな振袖を風除けにして、この見事な色を写し取りたい」と歌に詠まれた「大袖」は)、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ(秋の空にこそ欲しいと思われるほどでした)。 \*「おほふばかりの袖」は<「大空に覆ふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ」(後撰集春中、六四、読人しらず)>が引き歌として注に参照紹介されている。理屈としては筋の通る言い方だろうし、「袖」の語からは比較対象の春の町の、胡蝶第一章第一段に三月は船樂での中島からの眺望とあった「こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて」の見事さが思い起こされ、それだけに実際の暴風雨被害の悲惨さからは遠い印象で、いささか作者の歌語表現が悪酔い気味に感じられる。いやだから、台風さえ情緒に過ぎない当時の王朝雲上人の生活感が表現されている、とは言えるのかも知れない。

暮れゆくままに(夜になるほど風は強まり)、ものも見えず吹きまよはして(暗がりの中を吹き荒れて)、いとむくつけければ(とても怖いので)、御格子など参りぬるに(雨戸を閉め切っていたので)、うしろめたくいみじと(様子が分からず心配だと)、花の上を思し嘆く(花の身の上を思っって同情なさいます)。

## [第二段 夕霧、紫の上を垣間見る]

南の御殿にも(春の町にあっても)、前栽つくろはせたまひける折にしも(紫の上が前庭の手入れをさせ為さって居たという時に)、かく吹き出でて(秋嵐がこのように吹き出して)、\*もとあらの小萩(露払いの風を待つ「本荒の小萩」が)、\*はしたなく待ちえたる風のけしきなり(不用意に待ち受けてしまった風といったところでした)。折れ返り(枝も折れ)、露もとまるまじく吹き散らすを(露の一滴も残らないほど吹き散らされるのを)、すこし端近くて見たまふ(上は縁側近くまで出て御覧になります)。 \*「もとあら」は「本荒」と表記され<気がまばらに生えていること。一説に根元の方に花も葉もなく荒れていることを言う。>と古語辞典に説明がある。注には<「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそまで」(古今集恋四、六九四、読人しらず)>が参照紹介されている。この引歌は桐壺第二章第二段の御祖母北の方を鞆負命婦が弔う場面に桐壺帝からの贈歌として記された「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ(和歌 1-2)」の下歌としても引かれていた。このように、改めて「もとあらの小萩」という語を持ち出されると、「小萩がもと」という言い回しに、桐壺巻を読んだ当時は気付かなかった味わいのようなものを感じる。此処まで読んできた甲斐があった、かな。ただ、「もとあらの小萩」自体がどういうものかは知らないので少し画像などを Web 検索したが、あまり良く分かるものは見当たらなかった。ながらも、「木萩(きはぎ)」という種類のもの画像のいくつか、根元の地面近くから荒々しく枝分かれした「もとあら」っぽい印象のものがあっ

た。それに、その分かれた枝の中には横に低く伸びるものもあり、その枝先に花を付けたとしたら、露を大きく結んだ枝先は垂れ下がり気味になりそうだ。となると、引歌の歌筋は<垂れ下がった本荒の小萩の枝が重そうに露払いの風を待つように私は涙をためて貴方の帰りこそを待っています>だろうから、その情緒にも見合うかも知れない。一応、そんな風に見て置く。 \*「はしたなし」は<間が悪い、無作法だ、不都合だ、激しい>などとあり、歌語表現の洒落た言い回しの軽さを思えば<不用意に>くらいだろうか。

大臣は(源氏殿が)、姫君の御方におはしますほどに(寝殿西の間の明石姫のお部屋にいらっしゃる時に)、中将の君参りたまひて(中将の君が春の町に参りなさって)、\*東の渡殿の(東の対から寝殿に向かう渡り廊下で)小障子の(こしゃうじの、低い衝立の)上より(上越しに)、妻戸の開きたる隙を(寝殿南廂入口の妻戸の開いていた隙間から)、何心もなく見入れたまへるに(ふと寝殿東の間室内を覗きなさると)、女房のあまた見ゆれば(女房たちが大勢見えたので)、立ちとまりて(衝立の前で立ち止まって)、音もせで見る(音を立てないように見たのです)。 \*「ひんがしのわたどの」は注に<寝殿と東の対を繋ぐ渡殿。>とある。となると、中将君は寝殿に向かっているのだから、東の対の方から来たことになる。が、夏の町と春の町を繋ぐ中廊下は西寄りになれば奇怪しい。各町を繋ぐ廊下が建物の外側を回廊していたのでは不便この上ない。が、簡素な通用路や通用門なら其処此処に在っても不思議は無い。中将君は北東区画の東の対に住んでいる。仮に外を通ったとしても、風だけで雨が無かったなら短距離を走ってでも来たのかも知れない。単独行動のようだし、身軽な 15 歳の若者だ。そういうことなのだろう。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに(押し畳んで部屋の隅に寄せて在ったので)、見通しあらはなる\*廂の御座にあたまへる人、ものに紛るべくもあらず、\*気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき\*樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。 \*「ひさしのおまし」は注に<寝殿の南廂の御座所。>とある。寝殿東の間の南廂だ。 \*「けだかくきよら」は注に<「気高し」は上品でおかしがたい感じ。「清ら」は源氏物語では天皇・皇族の超一流の美に対して使われる表現。>とある。 \*「かばざくら」が分からない。中将君が 12 歳で元服し、大宮の三条邸から二条東院そして六条院夏の町へと移り住んで、三年越しについに垣間見た紫の上、だというのに、その艶姿を例えた「樺桜」がどういうものか分からない。大問題だ。ヤマザクラの一種。とか、カバノキ類に木肌が似ている桜の木。とか、分からない説明は辞書にあるが、分かる説明が無い。それでも、最も確からしい説明は<襲(かさね)の色目。表は蘇芳、裏は赤花。>と古語辞典にあり、Web 検索の色見本で赤系統の色合いという事は知れた。また今日の日常語で「カバザクラ」といえば「真樺(マカバ)の木材」を言うらしく、材木ページが数多くヒットする。その「マカバ」の色合いがベニヤの赤味とのことで、少し手触り感を覚える。で、一先ずは、赤味の強い桜の花ビラ、あたりを考えて置く。

\*あぢきなく(思わず)、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに(その御尊顔を拝し奉る中将君自身の顔もその赤味が移り来るように紅潮するほど)、愛敬はにほひ散りて(明るい表情が周りの人を引き付けて)、またなくめづらしき人の御さまなり(この上なく美しい上のお姿なのでした)。 \*「あぢきなし」は<不当だ、不都合だ>。不意に目にした義母に思わず興奮して顔を紅潮させたら、やはり不都合なのだろう。

御簾の吹き上げらるるを、人びと押へて(女房たちが押さえていたが)、いかにしたるにかあらむ(何かの弾みだろうか)、うち笑ひたまへる(微笑んでいらっしゃる上は)、いといみじく見ゆ(実に超然と見えます)。花どもを心苦しがりて(花々を心配なさって)、え見捨てて入りたまはず(見捨てて奥になどお入りなさりはしません)。御前なる人びとも(側近女房たちも)、さまさまにも

のきよげなる姿どもは見わたさるれど(それぞれ優れた容姿とは見渡せたが)、目移るべくもあらず(中将君は余人に目が移る筈ありません)。

「大臣の(親父殿が)いと気遠く(私を義母に、一切会わせず)はるかにもてなしたまへるは(遠ざけていらしたのは)、かく見る人(このように見た者が)ただにはえ思ふまじき御ありさまを(ただ事には思えないその美しい御姿を)、いたり深き御心にて(とても深く御警戒なさって)、もし(万一にも)、\*かかることもやと(間違いが在っては成らないと)思すなりけり(お考えに成ったのだろう)」 \*「かかる」は「斯かる(斯く在る、このような)」ではなく「懸かる(懸念される)」で、「懸かる事」は<不祥事、間違い>。「もや」は<もあらんや>の疑問表現にみえるが、「もし～もや」の構文なので<もし～もあるべくやあらん>の反語表現、なのだろう。

と思ふに(と思うと)、けはひ恐ろしうて(中将君はその親父殿の意向に背いているような今の状態に禁忌を犯しているかの恐れを覚えて)、立ち去るにぞ(立ち去ろうという時に)、西の御方より(西側のお部屋から)、内の御障子引き開けて渡りたまふ(襖障子を引き開けて殿が東の間にお出でなさいました)。

「いとうたて(いやひどい)、あわたたしき風なめり(煩い風ですね)。御格子下ろしてよ(格子窓を閉めなさい)。男どもあるらむを(このような時には見回りの、男たちの目も在ろうというのに)、あらはにもこそあれ(見えすぎて無用心だぞ)」

と聞こえたまふを(とお話なさるのを)、また寄りて見れば(中将君はまた衝立に寄って様子を見れば)、もの聞こえて(上が何かお応えなさり)、大臣もほほ笑みて見たてまつりたまふ(殿も微笑んで見返し申しなさいます)。親ともおぼえず(親とも思えない)、若くきよげになまめきて(若くきれいに色気があって)、いみじき御容貌の盛りなり(超然とした御美貌の盛りなのでした)。

女もねびととのひ(女も十分成熟して)、飽かぬことなき御さまどもなるを(申し分のない御二人の御姿を)、身にしむばかりおぼゆれど(中将君は心底見応えが在ると感心なさったが)、この渡殿の格子も吹き放ちて(この渡殿に面した格子窓も開いていて)、立てる所のあらはになれば(そこに立っている自分も見つかりそうなので)、恐ろしうて立ち退きぬ(怖くなってその場を立ち退きました)。今参れるやうにうち声づくりて(そして今しがた遣って参ったように咳払いを立てて)、簀子の方に歩み出でたまへれば(南面の簀子の方に進み出しなされば)、

「さればよ(そら、このように)。あらはなりつらむ(男の目に付いてしまったではないか)」とて、「かの妻戸の開きたりけるよ(そこの妻戸が開いていたものだから)」と、今ぞ見咎めたまふ(殿はすぐにその不始末を注意なさいます)。

「年ごろかかることにつゆなかりつるを(ながいことこんなことはちつともなかったというのに)。風こそ(風というものは)、げに巖も吹き上げつべきものなりけれ(本当に岩でさえ吹き動かしてしまうものなのだ)。さばかりの御心どもを騒がして(これほどに用心深い御二人のお気持ちも揺り動かして、)。めづらしくうれしき目を見つけるかな(普段では見られない貴重な光景を目にしたとは)」とおぼゆ(と中将君はお思いになりました)。

### [第三段 夕霧、三条宮邸へ赴く]

\*人びと参りて(見回りの男たちが参上いたして)、 \*「人びと」は注に<家司たち。>とある。こうした並外れた災害時の場面では、「人びと参りて」と言えば<建物の維持管理を司る家守役が手下を連れて主人の許に馳せ参じ、警護と状況報告をするのが大臣家に在っては当然の体制>というのが、当然の認識である事を前提にしているかの書き方に思えて、分かり難いし気に入らない。だとしても、もう少し分かり易く、この「人びと」の登場の様子を描写しても良さそうに思えてならない。「人びと」の語に、一体誰のことだ、と私は戸惑う。

「いといかめしう\*吹きぬべき風にはべり(大変厳しく被害も出そうな勢いで吹く風で御座います)。\*良の方より吹きはべれば(丑寅の方角から吹きますので)、この\*御前はのどけきなり(此方のお庭先はおとなしめです)。馬場の御殿、\*南の釣殿などは、危ふげになむ」 \*「吹きぬ」の「ぬ」は完了の助動詞で<吹いて行ってしまう>という語感だが、そういう事態が現時点では「べき(可能性が高い)」と予想される、という言い方になっている。なので、是は抗し難い力に止む無くという思いで、悪い事態を強調した言い方、とも言えるのだろうが、業務報告なら<被害が予測される勢いで吹く>と言い換える事も出来そうで、その方が分かり易いように思う。 \*「良」は「根」や「恨」のツクリにある字で、「こん・ごん」「えん・え」との読みがあるが、方角では<北東>を示す、とのこと。北東は十二支読みで言えば「丑寅」で、この「良」は<北東の方角>を意味して「うしとら」と読みがある。 \*「おまへ」は<お庭先>だけを言っているのではなく、殿がいらっしゃる<お側近く>の場所・区画・町なのかも知れない。ただ、建物内の<側近く>に問題がないことは殿自身にも分かることなので、外廻りの報告とすれば、庭先および他の区画の事、と読める。 \*「南の釣殿」は<六条院丑寅の町に夏の御殿として馬場殿と釣殿があり、花散里が住む。>と注があり、いかにも丑寅の町についての報告で、北東区画には確かに南庭があり、其処には池があり、其処には釣殿が確かに在ったらしい。とすると、改めて馬場殿と釣殿の位置関係や配置図が気になるが、それはもう、とても私の手には負えない。

とて、とかくこと行なひののしる(各部の点検作業を行い声出し確認に追われます)。

「中将は、\*いづこよりものしつるぞ(何処から来たものか)」 \*「いづこより」とは殿も、東の対とは東の中門廊の方から遣って来た中将がどの入り口から来たのかを不審に思ったのか、と思ったが少し先読みすれば、殿は中将が出仕しているか何かで六条院に居ないことを承知していて、外から帰って東南中門玄関から遣って来たと思った、という事情らしい。また、この文には「とのたまへば」のような場面説明もなく、「人びと参りて」からの語り口は、あえて舌足らず気味の切迫した慌しさを表現する演出なのかも知れないが、当時の状況に付いて基本的な認識が乏しい私には違和感が強い。

「\*三条の宮にはべりつるを(三条宮邸におりましたが)、『風いたく吹きぬべし(風がひどく吹き荒れそうです)』と、人びとの申しつれば(何人もが申しましたので)、おぼつかなさに参りはべりつる(此方の様子が気懸かりで参りました)。 \*「さんでうのみや」は注に<三条の宮には夕霧の祖母大宮がいる。七十歳前後。>とある。

かしこには(あちらには、お祖母様が)、まして心細く(いっそう心細く)、風の音をも(風の音にさえ)、今はかへりて(今はご高齢すぎて却って)、若き子のやうに懼ぢたまふめれば(幼子のように怖がっていらっしゃいますので)。心苦しさに(心配なので)、まかではべりなむ(これから下がって向かおうと思います)」

と申したまへば(と申しなさると)、

「げに(それは)、はや(早く)、もうでたまひね(行って差し上げなさい)。老いもていき(老いというものが進んで行くと)、また若うなること(また子供のようになることは)、\*世にあるまじきことなれど(人生に於いては困ったことだが)、げに(実際は)、さのみこそあれ(必ずそうなるようだ)」 \*「世にあるまじき」の「世」は<世の中、世間、世界>ではなく<生涯、人の一生、人生>なのだろう。この「あるまじき」は<あってはならない>ではなく<不都合な、具合の悪い、困った>かと思う。

など、あはれがりきこえたまひて(殿は大宮にご同情申し上げなさって)、

「かく騒がしげにはべめるを(こうした不穏な雲行きですので)、この朝臣さぶらへばと(せめて倅でもお側に控えておりましたらご安心かと)、思ひたまへ譲りてなむ(存じまして其方へ遣わせませす)」と(と中将に)、御消息聞こえたまふ(大宮へのご挨拶を申しなさいます)。

道すがらいりもみする風なれど(道すがら向きを変えて激しく吹き乱れる風なれど)、うるはしくものしたまふ君にて(律儀に行儀の良い中将の君なので)、三条宮と六条院とに参りて(三条宮の祖母殿と六条院の大殿とに参上して)、御覽ぜられたまはぬ日なし(ご挨拶申し上げない日はなく、)。内裏の御物忌などに(うちのおんものいみなどに、宮中の御謹慎日などで)、えさらず籠もりたまふべき日より外は(止む無く宿直しなければならない日以外は)、いそがしき公事(忙しい政務や)、節会などの(祝日式典などの)、暇いるべく(時間が取られる)、ことしげきにあはせても(多用な時に重なっても)、まづこの院に参り(先ず六条院に伺って)、宮よりぞ出でたまひければ(然る後、三条宮邸から出仕なさっていらしたので)、まして今日(まして今日は)、かかる空のけしきにより(こうした生憎の悪天候で)、\*風のさきに\*あくがれありきたまふも\*あはれに見ゆ(風に吹かれて彼方此方と歩き回りなさるのも何ともご立派に見えます)。 \*「風の先」は<風向き>。「風の先に」は<風向きのままに→風に任せて→風に吹かれて>。 \*「あくがれありく」は<さ迷い歩く←彼方此方へ行く>の洒落言葉。 \*「あはれ」は<感銘・感心>だが、「見ゆ」は作者・語り手による印象誘導であり、軽口口調のこの文からして、その健気さを揶揄しているのだろうと<何ともご立派>くらいにする。

宮、いとうれしう、頼もしと待ち受けたまひて、

「ここらの齢に(この歳になるまで)、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ(今までこれほど激しい嵐には遭いませんでした)」

と、ただわななきにわななきたまふ(ただ震えに震えていらっしやいます)。

「大きな木の枝などの折るる音も、いとうたてあり(とても恐ろしく、)。御殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに(邸の瓦一枚さえ残らないほど吹き散らすこの嵐の恐ろしさの中を)、かくてもものしたまへること(このように来て頂きまして)」

と、かつはのたまふ(それでも御礼を仰います)。

そこら所狭かりし御勢ひのしづまりて(あたり所狭しと配下を従えていらした前太政大臣の御権勢も四年前の御逝去で鎮まった三条邸の未亡人で在る大宮は)、この君を頼もし人に思したる(今はこの中将君を頼りにお思いという)、常なき世なり(無常の世の中です)。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど(今でも大宮に対する世間の尊敬の念は薄らいではいらっしやらないが)、内の大殿の御けはひは(惣領の内大臣の大宮に対する御態度は)、なかなかすこし疎くぞありける(どうにも少し疎遠気味なのでした)。

中将、夜もすがら荒き風の音にも(夜通し吹き荒れる風の音にも)、すずろにもものあはれなり(ふと暖かい情感を覚えていました)。心にかけて恋しと思ふ人の御ことは(結婚を念頭に恋しく思う藤原の二姫の御事は)、さしおかれて(差し置いて)、\*ありつる御面影の忘れぬを(先程目にした紫の上の面影が忘れられないのを)、 \*「ありつる」は<在ったところの→さっき在った→先程の>という意味の、ほぼ慣用句のようだ。

「こは(これは)、\*いかにおぼゆる心ぞ(どうしたいという気持ちなのだろう)。あるまじき思ひも\*こそ添へ(義母との姦淫という間違いまでも望むとしたら、)。いと恐ろしきこと(魔力に魅入られた心で、とても恐ろしいことだ)」と、みづから思ひ紛らはし(自ら気を逸らせて)、異事に思ひ移れど(別の事を考えるが)、なほ(それでも)、ふと\*おぼえつつ(ふと上の面影が思い出されて)、 \*「いかに～ぞ」は疑問構文。「おぼゆ」は<自然に思ってしまう、浮かんでくる、感じる、思い出される>。「心」は<考え>だが、此处では未来予測なので<意図・心積もり>であり、「自然に浮かぶ意図」とは<願い・願望>なのだろう。 \*「こそ添へ」は仮定文で係り結び構文ではない。したがって、この「添へ」の已然形で文節とはならない。「添ふ」は<加わる>で「こそ添へ」は<～という事が加わるとしたら>だが、「加わる」ものは「思ひ」なので<～まで考えたら>という言い方になる。 \*「おぼゆ」は<自然に思ってしまう>だが、此处では「ありつる御面影の忘れぬを」を受けた文なので、具体的には<上の面影を思い出す>ということだ。

「来し方行く末(育った大宮邸の藤原勢の中や出仕してみた宮中でも)、ありがたくものしたまひけるかな(あれほどの美形は無いという上の御姿だったな)。かかる御仲らひに(あれほどの美男美女の取り合わせの御夫婦仲なのに)、いかで\*東の御方(どうして地味な東の御部屋様が)、さるものの数にて立ち並びたまひつらむ(同じ妻の座に立ち並んでいらっしやるのだろう)。たとしへなかりけりや(比べものにならないではないか)。あな(何と)、\*いとほし(慈悲深い、殿の御心だろう)」 \*「ひんがしのおほんかた」は<六条院東北の町の御方、すなわち夕霧の母代の花散里。>と注にある。 \*「いとほし」はいつも難しい。直前の「たとしへなかりけりや」は確かに、紫の上に比べるべくもない東の御方の劣った容貌を意識した言い方、ではあるだろうが、東の御方を非難する意図には見えない。尤も、東の御方たる花散里に対する中将の辛らつな見立ては、少女第六章第五段の三年前は二条東院で殿が花散里に中将の母代わりの世話を頼む場面で、「もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ瘦せに御髪少なる」などとみすばらしく語られていた。が、それだけに、それは既知の認識であり今さら改めて論うべきものでもなく、今は東御方の容姿に踏み込む場面でもない。つまり此处では、その、上とは比べものにならないほど劣った容貌の東の御方を、同じ妻の立場に就かせている殿の処遇にこそ驚いている、という文意だろう。即ち、「いとほし」は殿に対する中将の感想であり、それは下文の「大臣の御心ばへをありがたしと思ひ知りたまふ」に繋がるものと考えべき、かと思う。中将は、東御方の心根の優しさは知っている。が、それを以って妻の座に相応しい人柄とは考えていないようだ。殿の東の御方への評価は、多分、母性であり、姉代わりであり、宮中育ちで諸事の慣習所作に明るい頼もしさで、同じ王族とは言え紫上は宮中生活の経験が無く、可愛らしさは無類だが、源氏殿の立場を支える



には花散里の存在が欠かせない、という計算かと思う。が、そうした価値観は中将には思い至らず、殿の処遇を、恵まれない境遇に在った可哀相な心優しい王家筋の義理の叔母を深い思い遣りで庇護した、という面だけに見て、無償のご厚情を賜わったとでも考えたのだろう。多分、この「いとほし」は「慈しい」に近い部類の言い方だ。紫の上もそうだが、この花散里にも殿の種付けが実らなかった、という設定は、誰かの実話を引いたとしても、必ずや作者に上手い計算が立っての事には違いない。

と\*おぼゆ(と考えてしまいます)。大臣の御心ばへを(父上の御意向を)、\*ありがたしと思ひ知りたまふ(尊くて偉いと思ひ知りなさいます)。\*「おぼゆ」は<思ってしまう>。いろいろと思うので<考えてしまう>。内心文なので敬語表現に成らない。\*「ありがたし」は<めったにないので貴重だ→尊い→感謝する>だから現代語と同じだ。が、此处では人物評価であり、原義の<貴重な存在>自体を強く感じさせるので、より積極的に<尊くて偉い>とまで言ってしまう。

人柄のいとまめやかなれば(中将君は人柄が至って真面目なので)、\*似げなさを思ひ寄らねど(義母に不相応な恋慕を募らせはしないが)、「さやうならむ人をこそ(あのように美しい人を)、同じくは(同じ結婚相手にするなら)、見て明かし暮らさめ(見て暮らしたいものだ)。限りあらむ命のほども(限りある寿命とは言え)、今すこしはかならず延びなむかし(少しは必ず延びるだろう)」と\*思ひ続けらる(などと考え続けてしまいます)。\*「似げなさ」は<不相応な様、不都合な状態>で<義母との肉体関係>を意味する。「思ひ寄る」は<愛着を寄せる→恋情を募らせる>。\*「思ひ続く」は<考え続ける>。現代語で「思い続ける」と言う<愛情を持ち続ける>という意味で、中将はそれを避けようと思うものの、という文脈だ。なお、「らる」は受身の助動詞で<自然にそうになってしまう>や<そうせざるを得ない>または<そうになっていることを認める言い方の敬語表現>を意味し、此处では<してしまう>だ。

#### [第四段 夕霧、暁方に六条院へ戻る]

暁方に風すこし\*しめりて、\*村雨のやうに降り出づ。\*「湿りて」ということは、明け方までは強風だけで雨は降っていなかった、ということか。\*「むらさめ」はムラに降る雨。大辞林には<ひとしきり強く降ってやむ雨。強くなったり弱くなったりを繰り返して降る雨。にわか雨。驟雨(しゅうう)。>とある。また、古語辞典には<にわか雨。秋から冬にかけてよく降る。>とあって、それが「のやうに(いかにも秋らしく)」という言い方になるのかとも思ったが、別に秋や冬の季語ではないようで、「のやうに」は単なる例示説明の言い方らしい。

「六条院には(六条院では)、\*離れたる屋ども倒れたり(離れ屋が幾つか倒れている)」\*「はなれたるやども」は、先に六条院の見回りが「馬場の御殿、南の釣殿などは、危ふげになむ」と源氏殿に報告していたのを思い起こさせる。

など人びと申す(などと三条宮の家人たちが申します)。

「風の吹きまふほど(こんなに風が吹き舞うと)、広く\*そこら\*高き心地する院に(広くて風の通りが良い割に高すぎる建物が危うく思える六条院では)、人びと(家人たちは)、おはします御殿のあたりにこそしげけれ(殿のいらっしゃる建物近くには大勢いても)、東の町などは(東の町の御方などは)、人少なに思されつらむ(人の少なさを心細く思っていらっしゃるだろう)」\*「そこら」は<その近辺の場所や程度>を示す代名詞の「其処ら」ではなく、「幾許」と表記される<多数の、はなはなだし

く>という意味の副詞らしい。この「そこら」は馴染みが無い言葉だが、「幾許」はむしろ「いくばく」と読めて、「いくばく」ならいくらかの、ある程度の>という意味で少しは感触がある。また、「いくばく」は「いくだ」という言い方もする。で、「幾許」は「ここだ」「ここぼ」「ここぼく」「そこぼ」「そこぼく」「そこらく」などの読み、というか言い方もあるらしい。とすると、「そこら高き」は<非常に高い>という意味だろうが、特に此処で「そこら」と言うのは、「広く其処ら」の意味も被せられているのかも知れない。とすると、「広くそこら高き」は<広い割には高すぎる>で、その「広い割」は<広くて風通しが良過ぎることに対して>の意味だろう、と読む。\*「高き」は、建物の高さ、なのだろう。ただ「心地する」は印象なので、「高し」が<立派な、優れた>にも見えるが、それでも建物についての修辞だろうから、やはり高い建物がまともに風を受けて、被害が出やすいことを案じての「心地する」と読む。

とおどろきたまひて(と中将はお気づきなさって)、まだほのぼのとするに参りたまふ(まだ空がほのかに白み始めたばかりの夜明け前に六条院に伺いなさいます)。

\*道のほど(その道すがら)、横さま雨いと冷やかに吹き入る(横殴りの雨がとても冷たく牛車に吹き入ります)。空のけしきもすごきに(空模様も荒れ気味だというのに)、あやしく\*あくがれたる心地して(妙に浮き足立つ気分がして)、\*「道のほど」とあるが、どういう編成の一行だったのだろう。中将の隨身は四人、と古語辞典にある。\*「あくがる」には、確かに<魂が抜けてさまよう>という原義はありそうだが、中将は悪天候に圧されて怖じているのではない。「けしきもすごきに」の「に」は逆接の<～なのに>で、中将はまた紫の上の面影を思い出して、心を浮き立たせていた、に違いない。それが「あやしく」の意味だろう。

「何ごとぞや(何だろうな)。またわが心に思ひ加はれるよ(また余計なことを考えてしまう)」と思ひ出づれば(と上の面影が思い出されて)、「いと似げなきことなりけり(義母への横恋慕なんて、本当に良くないことだからな)。あな(全く)、もの狂ほし(始末が悪い)」

と(とそれでも)、とざまかうざまに思ひつつ(いろんな場面を考えながら院に到着し)、東の御方に(東の町の御方に)、まづまうでたまへれば(まず御見舞い申し上げなさんと)、\*懼ぢ極じておはしけるに(脅えきっていらっしやっただので)、とかく聞こえ慰めて(あれこれと申し宥めて)、人召して(用人を呼んで)、所々つくるはすべきよしなど言ひおきて(所々を修理すべき指示を言い置いて)、南の御殿に参りたまへれば(南の町の寝殿に伺いなされば)、まだ\*御格子も参らず(まだ女房は格子窓も開け申ししていません)。\*「懼ぢ極じて(おちごうじて)」は注に<『集成』は「極(ごう)」は「極(ごく)」の音便、疲れる意、『完訳』は通説の「困(こう)じて」とする。「極(ごう)ず」が適切。>とある。\*「みかうしもまゐらず」は注に<御簾を上げてない。>とある。半蔀格子を跳ね上げて、御簾を巻き上げるのが女房の朝の初めの仕事、とは何処かで語られていたが、態々こういう注があるという事は、時間からして蔀戸は開けられていたが、殿の指示で御簾は下げられたままだった、ということなのだろうか。であれば、此処の言い換えは<まだ御簾を上げさせ為さってはありません>くらいか。そういう風には書いていないように見えるが、何か下文にそうでなければ辻褃が合わない記事があるのかも知れない。

おはしますに当れる高欄に押しかかりて(中将は殿がいらっしやる場所の前に当たる縁側の高欄に身を押し当てて)、見わたせば(庭を見渡せば)、山の木どもも吹きなびかして(築山の木々も風向きの後を残して)、枝ども多く折れ伏したり(枝の多くが折れ落ちていました)。草むらはさらにもいはず(草むらの乱れはいうまでもなく)、桧皮(ひはだ、屋根を葺いていたろう檜皮や)、

瓦(かはら、寝殿の装飾屋根に用いた焼瓦)、所々の立葎(部屋の仕切りにしていたはめ込み葎や)、透垣(庭の飾り垣根)などやうのもの乱りがはし(などのようなものが散らばっていました)。

日のわづかにさし出でたるに(日がわずかに差し出すと)、憂へ顔なる庭の露きらきらとして(悲惨な状態の庭が涙を零したように露がきらきらと光って)、空はいとすごく霧りわたれるに(雨上がりの空はひどく霧が立ち込めて)、そこはかたなく涙の落つるを(見通しも立たないような情け無い気分で中将はうっすらと涙がちになったが)、おし拭ひ隠して(それを拭き隠すようにして)、うちしはぶきたまへれば(咳払いなさると)、

「中将の声づくるにぞあなる(中将が来た合図をしているようだ)。夜はまだ深からむは(夜はまだ明けていないだろうに)」

とて、起きたまふなり(殿はお起きになるようです)。何ごとにかあらむ(何か話しているのだろうか)、聞こえたまふ声はせで(上が殿に申しなさる声は聞こえないが)、大臣うち笑ひたまひて(親父殿は笑い声を上げなさって)、

「いにしへだに知らせたてまつらずなりにし(昔の若い時でさえ申し上げたことが無かった)、暁の別れよ(早朝の別れだな)。今ならひたまはむに(今になって味わうのでは)、心苦しからむ(辛い事だろうね)」

とて、とばかり語らひきこえたまふけはひども(少しばかり語らい申しなさる御二人の気配は)、いとをかし(とても楽しそうです)。女の御いらへは聞こえねど(女の御答えは聞こえないが)、ほのぼの(ほのかに)、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉の趣きに(このように漏れ聞こえる戯れなさっている言葉の遣り取りから)、「ゆるびなき御仲らひかな(変わることなく睦まじい仲の御宜しさだな)」と、聞きゐたまへり(中将は聞いていらっしゃいました)。

#### [第五段 源氏、夕霧と語る]

\*御格子を御手づから引き上げたまへば(一枚格子を殿が御自分で引き上げなされたので)、気近きかたはらいたさに(中将は近すぎると遠慮して)、立ち退きてさぶらひたまふ(下がって控えなさいます)。\*「みかうし」を半葎(はじとみ)だとすると、その上半分は外へ跳ね上げる。此处では「引き上げ」とあるので、先に注に在った「御簾を上げていない」に合致する、のかも知れない。しかし、むしろ本文に従うなら、「引き上げ」とあるのだから「一枚葎を室内側に引き上げた」と読むべきで、それが成立しない記事が無い限りは予断を持つべきではない、と思う。また、一枚格子の場合は御簾を外側に掛けるが、格子が閉まっている時は御簾は巻き上げられているので、格子を引き上げる時は外に居る人と顔を直接合わせてしまう。さらに、外の真正面に居れば室内まで見えてしまうので、中将は横に「立ち退きて」控えたのだろう。

「いかにぞ(どうだった)。昨夜、宮は待ちよろこびたまひきや(宮はお前が来たのを喜んでいらっしゃったか)」

「しか(はい)。はかなきことにつけても(ちょっとしたことでも)、涙もろにもものしたまへば(涙もろくなさるので)、いと\*不便にこそはべれ(困ってしまいます)」 \*「ふびん」は今だと「不憫」と書

いて<可哀相なこと、憐れむべき事>だが、「憐れむ」は庇護者目線で上位者には不相応な言い方だ。ただ、そうした意味はあるだろうから<敬意を持って宥めなければならない相手なので、対応に苦慮する、仕事が捗らずに困る>みたいに考えて、言葉本来の<困る>と言い換える。

と申したまへば(と中将がお応え申しなさると)、笑ひたまひて(殿はお笑いになって)、

「今いくばくもおはせじ(この先長くもいらっしゃらないだろう)。まめやかに仕うまつり見えたてまつれ(まめにお世話して差し上げなさい)。内大臣は、こまかにしもあるまじうこそ(細やかな配慮が必ずしもお有りでないようだ)、愁へたまひしか(宮が嘆いていらっしゃたしな)。人柄あやしうはなやかに(藤原殿は人柄が際立って派手で)、男々しき方によりて(男らしく物事をはっきりとお示しなさる方なので)、親などの御孝をも(親などへの敬いを示すにも)、いかめしきさまをば立てて(大そうな外見ばかりを飾り立てて)、人にも見おどろかさむの心あり(世間の注意を引こうという計算があつて)、まことにしみて深きところはなき人になむ(まことに胸に染む深い思い遣りが無い人で)、ものせられける(いらっしゃる)。さるは(そうはいつても)、\*心の隈多く(思慮深く)、いとかしこき人の(とても聡明な人で)、\*末の世にあまるまで(後世に名を残すほど)、才類ひなく(ざえたぐひなく、有能で)、\*うるさながら(多才だというのに)。人として(人としては)、かく難なきことはかたかりける(このように難が無いと言うのは難しいようだ)」 \*「ころのくま」は<心のすみずみ。人に知られない心の奥底。>と古語辞典にある。「こだわり」のようにも見えるが、文意としては訳文の<思慮>に従いたい。 \*「すゑのよにあまるまで」の「末の世」は<後世>と<末世>、「あまる」は<多すぎて残る>と<度を過ぎて難と成る>の、それぞれが複意の言い方で、訳文の<この末世には邪魔なほど>という皮肉は暗意で、むしろ表意は<後世に力が及ぶ>という褒め言葉に見える。 \*「うるさし」は<細々と煩わしい>と<細部まで巧みで優れている>の両義がある、とのこと。「うるせし」「うるはし」などとの共通性もありそうだが、何れにしても、「細々とした」語感があるので、多分<多才>を意味するかと。

などのたまふ。

「いとおどろおどろしかりつる風に(とても激しかった昨日の風に)、中宮に(中宮の家屋保全や警護として)、はかばかしき宮司などさぶらひつらむや(しっかりした役人たちが詰めていただろうか)」

とて、\*この君して(この中将君を遣いにして)、御消息聞こえたまふ(殿は中宮に御見舞い申し上げなさいます)。 \*「この君」は殿の倅であり、これは六条院という私邸での事柄ではある。が、中宮は帝の後であり、殿は太政大臣であり、倅君は左近衛府中将である。中宮には中務省の中宮職が仕える、といつても具体的な用人には舍人や蔵人が選ばれ、要人警護は近衛舍人が当たるとなれば、その上官が中将であり、元より役人の総差配が太政大臣なので、これは私事ながら、中枢の公事でもあるという次第。

「夜の風の音は、いかが聞こし召しつらむ(いかがお聞きあそばしたでしょうか)。吹き乱りはべりしに(嵐が吹き荒れました時に)、\*おこりあひはべりて(私は風邪に遭ってしまいました)、いと堪へがたき(たいへん体調が悪く)、ためらひはべるほどになむ(休んでいるところです、ので今は失礼致します)」 \*「おこり」は<《隔日また周期的に起こる意》間欠的に発熱し、悪感(おかん)や震えを発する病気。主にマラリアの一種、三日熱をさした。えやみ。わらわやみ。瘧(ぎゃく)。《季夏》>と大辞泉に

ある。「あふ」は「乱り侍りしに」「合ひ侍る」のくちょうどその時に合わせて>という洒落言葉に成っていて、「オコリ遭ふ(風邪を引く)」というのは中宮である養女の貴方に養父ながら太政大臣である私が直接出向かないで済む為と言わざるを得ない口実なので、実際には心配ありません、ということを示しているのかも知れない。

と聞こえたまふ(と申し送りなさいます)。

#### [第六段 夕霧、中宮を見舞う]

中将\*下りて(中将は殿の御前を下がって)、\*中の廊の戸より通りて(中廊下の仕切り戸を抜けて春の町から秋の町の中宮の寝殿に)、参りたまふ(参上なさいます)。 \*「下る(おる)」は<貴人の前から退出する。さがる。>という意味のようだが、古語辞典には<宮中から退出する。>ともあり、畏まった物言いかも知れない。半ば公務という意味合いだろうか。 \*「なかのらう」と作者は簡単に言うが、どういうものか分からない。その「戸」も当然分からない。ただ、おおよその位置は見当が付く。春の町の西の対の更に西側で、南庭の釣殿に向かう廊下とは普通の邸なら西側中門廊が在ったとしたら其れに繋がって西へ延びるような、もしくは西の対の恐らく西南端から直接西へ延びて、秋の町の東の対の東南端に向かうような、配置ではあったのだろう。しかし、春の町と秋の町の境は土塀を設けて在ったのか、廊下自体が片側か両側を塞いであれば仕切りになるし、生垣や林で区切ることも出来るが、その様相について触れた記事は此处まで無い。胡蝶第一章第四段の「中宮の御読経」でも、前日の春の町での花見客がどのように秋の町に移ったのかが疑問だったが、何せ基本的な様式や規模が分からないので、本当に見当が付かない。そこで、仮にこの「中の廊の戸」をそのまま読めば、開放空間に戸があるのは変だから、壁のある廊下に戸が付いていたのだろうとも考えられる。しかし、「中の廊」は<中門廊>であり、「戸」は普通なら西側中門に当たる<戸>が此处では春の町と秋の町との土塀を通す通用門で、其れを「中の廊の戸」と呼んだのだとすれば、他の勝手口はともかくも春の町と秋の町を直接に渡す中廊下は無かったものとするのも、特に秋の町の独立性を思えば説得力があるようにも見える。そうだとすれば、「下りて」は中将は<庭へ下りた>と読めるのかも知れない。

朝ぼらけの容貌(朝日を背中に受けた中将の姿は)、いとめでたくをかしげなり(とても立派な美しい影でした)。東の対の南の側に立ちて(東の対の南の縁側に立って)、御前の方を見やりたまへば(寝殿の方を御覧になると)、御格子(格子蔀戸は)、まだ二間ばかり上げて(まだ二間しか上げてなくて)、ほのかなる朝ぼらけのほどに(ほのかな朝日なので)、御簾巻き上げてみたり(部屋を明るくしようと、御簾を上まで巻き上げて女房たちが廂に出ていました)。

高欄に押しかかりつつ(南正面の縁側には高欄に身を押しかけている)、若やかなる限りあまた見ゆ(若々しい女房たちばかりが大勢いるのが見えます)。うちとけたるはいかがあらむ(嵐の過ぎた気の緩みか、だらしなく無駄話をしているようなのは如何かと思うものの)、さやかならぬ明けぼののほど(まだ明瞭な明るさでは無い早朝なので)、色々なる姿は(色とりどりの服を着た姿は)、いづれともなくをかし(どの女も感じが良い)。

童女(わらはべ、中宮は童女を)\*下ろさせたまひて(庭へ下ろさせなさい)、\*虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり(籠の中の虫たちに草花の露を吸わせていらっしやったのです)。 \*この「下ろす」は<庭へ下ろす>。 \*「むしのこども」は<幾つかの虫籠>ではあるのだろう。複数のものに「ども」を付けるのは、現代語よりも単体と複数の区別意識が強い、のだろうか。しかし、複数である筈の童女には「ども」も「たち」

も無い。何人かの童女がそれぞれに持った虫籠を草露の所に置いているらしい様子だが、「飼ふ」は<動物に飲食物を与える>と古語辞典にあり、主語は<虫籠の中の虫たち>だ。そこに焦点を当てる「ども」なのだろう。

紫苑(しをん、青紫)、撫子(なでしこ、桃色)、濃き薄き相(あこめ、子供服)ともに、女郎花(をみなへし、黄色)の汗衫(かざみ、上着)などやうの、\*時にあひたるさまにて(秋らしい装いで)、四、五人(よたり、いつたり)連れて、ここかしこの草むらに寄りて、色々の籠どもを持ってさまよひ、撫子などの、いとあはれげなる枝ども取り持て参る、霧のまよひは(その霧に紛れた姿は)、いと艶にぞ見えける(実に優雅に見えました)。 \*「とき」は「八月」とあった。葉月、仲秋。

吹き来る\*追風は(寝殿越しに吹いてくる西風は)、\*紫苑ことごとくに匂ふ空も(庭の紫苑菊が時たま匂う感じや)、香のかをりも(寝殿の薫物の香りにも)、\*触ればひたまへる御けはひにやと(中宮がお触れ寄りなされた御気配かと)、いと思ひやりめでたく(とても尊く思われ)、心懸想せられて(緊張してしまって)、立ち出でにくけれど(中將は目通りに気後れしたが)、忍びやかに\*うちおとなひて(遠慮がちに咳払いして)、歩み出でたまへるに(寝殿に進みなさると)、人びと(女房たちは)、けざやかにおどろき顔にはあらねど(ひどく意外そうな慌てた風ではなかったが)、皆すべり入りぬ(皆さっと奥へ引き込みました)。 \*「おひかぜ」は<背後から吹く風>だが、中將の後ろから吹く風では無く、寝殿の向こう奥から東の対に居る中將に向かって「吹き来る」西風。 \*「紫苑」は茎が2メートル近い背の高いキク、とのことで、階上の縁側に花の匂いが吹き上がるがあったのだろう。 \*「触ればふ」は<触れる、近づく。むつまじく触れ寄る。>と古語辞典にある。 \*「うちおとなふ」は訳文に<咳払いする>とある。「おとなふ」は<音を立てる>と古語辞典にあり、「うち」は<あえて>の語感なので、従う。

\*御参りのほどなど(中宮が入内なされた時は)、童なりしに(中將は十歳の子供だったので)、入り立ち馴れたまへる(御簾の中に立ち入って慣れ親しんでいらっしやだったので)、女房なども(中宮の女房たちも)、いと\*けうとくはあらず(ひどく余所余所しくはありません)。 \*「おんまゐりのほど」は注に<中宮の入内は「絵合」巻。夕霧、十歳の頃である。>とある。5年ほど前のことであり、当時今上帝13歳、中宮は梅壺女御で22歳。中將と帝は三歳違いだ。ところで、現在は中將15歳、帝18歳、中宮27歳だが、紫の上は28歳だ。18歳の帝の后が27歳の中宮なのだから、15歳の中將に28歳の紫の上はまだ十分に妙齡の内かも知れない。 \*「けうとし」は<親しまない>。

御消息\*啓せさせたまひて(中將は殿のご挨拶を中宮に申し上げなされて)、宰相の君、内侍など、けはひすれば(側近女房が近くに居たので)、私事も忍びやかに語らひたまふ(身内話は小声でお話なさいます)。これはた(こちらはこちらで)、さいへど(何と言っても)、気高く住みたるけはひありさまを見るにも(気品高く暮らしていらっしやる中宮の様子を見るに付け殿の政治力を実感し)、さまざまにもの思ひ出でらる(紫の上との私生活の充実振りや、さらには東の御方を思えば、中將は殿の生き方にいろいろなことを考えさせられるのでした)。 \*「啓す(けいす)」は天皇以外の王室に<申し上げる>の意で使う語、とのこと。天皇には「奏す(そうす)」を使う、とのこと。